

府中町ふるさと歴史散歩

〔第11回〕

国際理解教育と地域の文化財 ②

広島県は中国の中核であるため、海外から高校生や大学生・大学院生、教育関係者や地方の行政担当者が研修や留学で訪れ、日本理解のためにしばしばホームステイがアレンジされる。

海外を旅したとき、必ず出会う文化財として石や岩を使った遺物や遺跡がある。広島から飛行機で行ける中国・西安の博物館には素晴らしい筆致の石碑の群、韓国の古代百済の都・扶余では石塔やユーモラスな石像、ヴェトナムの古都・フエでは、科挙の合格者を記した石碑群（ヴェトナムは漢字文化圏であったが、19世紀にフランスの植民地となり、現在はアルファベット表記をしているので、漢字で

書いてある石碑を読むと感心してもらえる）、ヨーロッパ各地では古代ローマの石造建築の遺跡と出会う。そこで、どこから来訪した人でも馴染める石造の文化財を最初に見てもらおうのである。

まず、多家神社へ案内をすると何組かの狛犬が迎えてくれる。そこで、獅子とライオン、イヌと猫などをめぐって、お互いの異文化理解が始まる。手水鉢の竜や、金属製の天馬を見て、さらに文化談義は続く。石段を登って、本殿がある境内に至ると、向かって右側に県の重要文化財の校倉造りの宝蔵（元は広島城三の丸稲荷社の社殿の一棟）が目を引く。奈良の都の正倉院を引き合いに出しながら、石の文

化から、高温多湿な日本の気候に合った木造建築について話が広がっていく。さらに、この宝蔵の校倉造りについては、説明板にある唯一同タイプが描かれている「信貴山縁起絵巻」の「飛び倉」の図のミニチュアを京都国立博物館で手に入れているので、これを使ってこの建築物の貴重さを強調する。次に、宝蔵の右手から竹林の小径を下って行くくとすぐ、曹洞宗・天龍山・長福寺と墓所がある。ここで、日本文化の特徴である神仏習合の話をする。インドのヒンドゥー教の人は、この宗教が多神教であるのでわかったような顔をしてくれる。

その後、真言宗の寺である道隆寺に行き、素朴な中世の

石塔や石仏、古くはないが水子地蔵を説明する。そして、ここから「上岡田古墳」をすぎ、やや登ったところにある「赤羽根新四国八十八カ所」が続く笹の小径のそここに建つ、赤い前掛けをした石仏のお姿を見て地域の信仰の歴史を感じ取ってもらうのである。最後に呉姿々宇山の中腹にあり、道隆寺の前身とも言われ、最近新しい説明板が設けられた「寺屋敷の石垣跡」付近からの広島市街地から瀬戸内海の抜群の眺望に見とれる。また、水分峽の幾重にも重なり合いながら水が落ちる様子が、鑑の草摺りに似ていることから、江戸時代に頼春水によって命名されたといわれる「草摺りの滝」



江戸時代の広島藩の画家・岡眠山が描いた「草摺りの滝（布はへの瀧）」
『安芸府中町史』第二巻から転載 広島市立中央図書館蔵

で心を休め、府中町の豊かさの一端を体感してもらうのである。

府中町文化財保護審議会委員

堤 隆一郎

問い合わせ

教育委員会生涯学習課

☎ 286-3272